

## [報告]第35回歴史地震研究会参加記

立命館大学文学研究科\* 濱野 未来

Impression Report of 35th General Meeting in Oita city, Oita

Miki HAMANO

Ritsumeikan University, Graduate School of Letters

18, Hiranokamiyanagi-cho, Kita-ku, Kyoto-city, Kyoto, 603-8355 Japan

### § 1. はじめに

2018年9月22日(土)から25日(火)にかけて、第35回歴史地震研究会が大分市 J:COM ホルトホール大分において開催された。連休中の開催にも関わらず、公開講演会は多くの聴衆が参加し、研究発表会においても口頭発表40件、ポスター発表18件と盛会のうちに終了した。本稿では、大分大会における、1~3日目の公開講演会・研究発表会・総会の模様を簡単に報告する。

### § 2. 研究会1日目(公開講演会)

研究会初日となる22日は15時から公開講演会「大友氏遺跡と慶長豊後地震」が催された。講演は坪根伸也氏による「中世豊後府内と大友氏遺跡の発掘調査」、平井義人氏による「慶長豊後地震はどのような地震だったのか～古文書の観点から～」、佐竹健治氏による「慶長豊後地震のモデルと別府湾の津波」というタイトルの3講演が行われた。



写真1. 公開講演会の様子

それぞれ遺跡痕跡・文献史料・地震モデル等といった異なる観点から慶長豊後地震を捉えたものであり、講演会全体を通して聴くことで多角的な理解につながる内容であった。またその点では、理学・工学・歴史学・社会学・防災科学などの各方面から地震やそれに関わる諸現象を捉える歴史地震研究会ならではの講演であったといえる。さらに慶長豊後地震を検討

するうえで、坪根氏の講演では中世、平井氏の講演では近世、佐竹氏の講演では現代からと、多様な時代視点からの報告であったことも聴衆の深い関心を誘っていたように感じられた。

今回の講演会は多くの一般参加者があり、消防法上による会場の定員が168名のところ、参加者165名(講師含む)という大盛況ぶりであった。

### § 3. 研究会2日目(研究発表会・懇親会)

研究会2日目の23日は、午前9時30分から研究発表会が行われた。今大会は、対象地域ごとの発表となっており、午前中は北海道・東北地方の地震と諸現象、関東地方の地震と諸現象の2つのセッションで8件の口頭発表が行われた。

ポスターセッションは、口頭発表会場の後方と隣接する会議室の一室で行われた。口頭発表と同様、こちらも様々な学問領域・手法での研究がみられた。なかには、中学生・高校生による地域の石碑や地名から災害記録や減災へのヒントを考察した研究もみられ、非常に印象深かった。同時に、災害・防災と地域教育の密接性を改めて認識させられた内容であった。



写真2. ポスターセッションの様子

\* 〒603-8355 京都府京都市北区平野上柳町18  
電子メール: gr0314xf@ed.ritsumeikan.ac.jp

昼休みとポスターセッションを挟んで、午後からは中部・近畿地方の地震と諸現象、南海トラフの地震と沿岸域の諸現象Ⅰ・Ⅱの3つのセッションに分かれて14件の口頭発表が行われた。南海トラフ地震に関するセッションが2部設けられている点からは、近年の歴史地震研究においてもやはり南海トラフ地震が研究・関心対象として傾注される傾向にあることが窺えた。

研究発表会1日目の終了後、懇親会が会場と同フロアにあるHoruto Garden大分にて行われた。多種多様な分野の参加者が終始和やかな雰囲気の中で交流する時間となった。



写真3. 懇親会(乾杯)の様子

#### §4. 研究会3日目(研究発表会・総会)

研究会3日目は九州地方(おもに豊後地域)の地震と諸現象の口頭発表セッションから始まり、6件の発表が行われ、開催地に関わるテーマということで、参加者から多くの質問や意見が出された。

その後、総会に先立ち、功績賞授賞式が行われ、歴史地震研究の発展に多大な貢献をされてきた北原親子先生へ松浦律子会長から賞状が授与された。



写真4. 功績賞授賞式の様子

総会では、2017年度の活動報告と決算報告、2018年度の会長選出と会長による理事の指名、2018年度の事業計画と予算案報告などの議事が行われた。

午後からは、史料批判とデータ利活用・その他のセッションが2部に分かれて行われ、12件の発表があった。歴史地震研究とくに前近代の地震研究において「史料」が果たす役割は非常に大きい、これまで筆者は主に古文書や古記録等をそうした「史料」として捉えていた。本セッションの研究発表により、文字史料のなかでも年代記や書簡、その他写真なども広義の「史(資)料」であり、今後の歴史地震研究においても活用が期待される情報群であると認識を改めることとなった。

#### §5. おわりに

本大会で、筆者は初めて口頭発表の機会もいただいた。歴史学系の学生にとって、学会での口頭発表は非常にハードルが高いものという認識が強く、その機会に恵まれることも少ない。今回発表の機会をいただけただけでなく、筆者の拙い発表にも、多彩な分野の方々へ質問や意見を頂戴できたことは、非常に有意義な経験となった。

こうした、学問領域を問わず広く歴史地震に関する研究発表を行うことができ、またそれを拝聴できる本研究会の様相は、歴史学系に限らず多くの学会と異なる恵まれた環境であろうと感じる。本大会は筆者にとって2度目の参加であるが、今回発表する立場として参加することで、改めてそうした印象を憶えた。

研究会の歴史のなかで、こうした環境を創り上げてくださった研究会創設者である宇佐美龍夫先生を筆頭とする事務局や関係者の皆様に御礼申し上げます。また最後になりますが、本大会行事委員長である松崎様をはじめとする行事委員の皆様へ、改めて厚く感謝申し上げます。